本間重慶撰

安息學校讀本　卷之三

大阪　福音社發兌

特18
714
No1322/23

自序

抑も安息日學校の起原を尋るに遡乎遠き昔に在りて、彼猶太人が其會堂に於て、安息日に舊約書を其會衆に讀聞せたるを以て起原とするものゝ如し、然れども現今の体裁をなすに至りしは僅かに前世紀の事にして其創設者の英人ロベルト、レークス氏なりとす、紀元千七百八十五年九月十四日を以て、英國グロセスター府に生れ、人となり慈善の心厚く、夙に貧苦無告の人を救恤せり、此府は惡漢無頼四方より群集し、曾て囚徒の數大に增加し、鍛冶師は晝夜を別たず鉄械を作り、

或ハ殖物灣(ボタニーベイ)に重罪囚を送るに、一航海數千を以て數ふるに至れり、當時之を目撃せる博愛なる氏の心腸ハ實に裂くるゝ如く、以爲らく「是れ全く幼時教育を受るれ機なく良心爲に曚く終に此刑辟に觸るゝのみ」と、是より心を幼童教育に委ね、千七百八十年四月を以て、遂に安息日學校を開くに至れり、

初め先づ二三教師を聘し、幼童を集め來りて聖書を教授せり、校則ハ頗る簡單にして「必ず顔を洗ひ、手を洗ひ、髮を櫛り來れよ」との三事項のみなりしが、漸々好結果を顯ハしければ、暫時にして遠近相傳へ到る處此設あるに至れり、

蓋し安息日學校ハ、信徒の信仰を培養し、未信者を誘導啓發する者なれば、傳道上必須の機關たり、今や吾國の基督教ハ、日進月歩、偉大の功績を奏せんとす、此際當局者豈に深く此に考ふる所なくして可ならんや、而して今日の教科書たる、たゞ一巻の聖書あり、是固より至寶至重の書須臾も欠く可らずと雖も、一意之れを幼童の頭腦にまで注入せんとする時ハ、徒らに倦厭の念を生ぜしめ、從來また之を繙くを欲せざるに至る、然らば先づ間接に種々の談話に依り漸々之を導くとを爲ざる

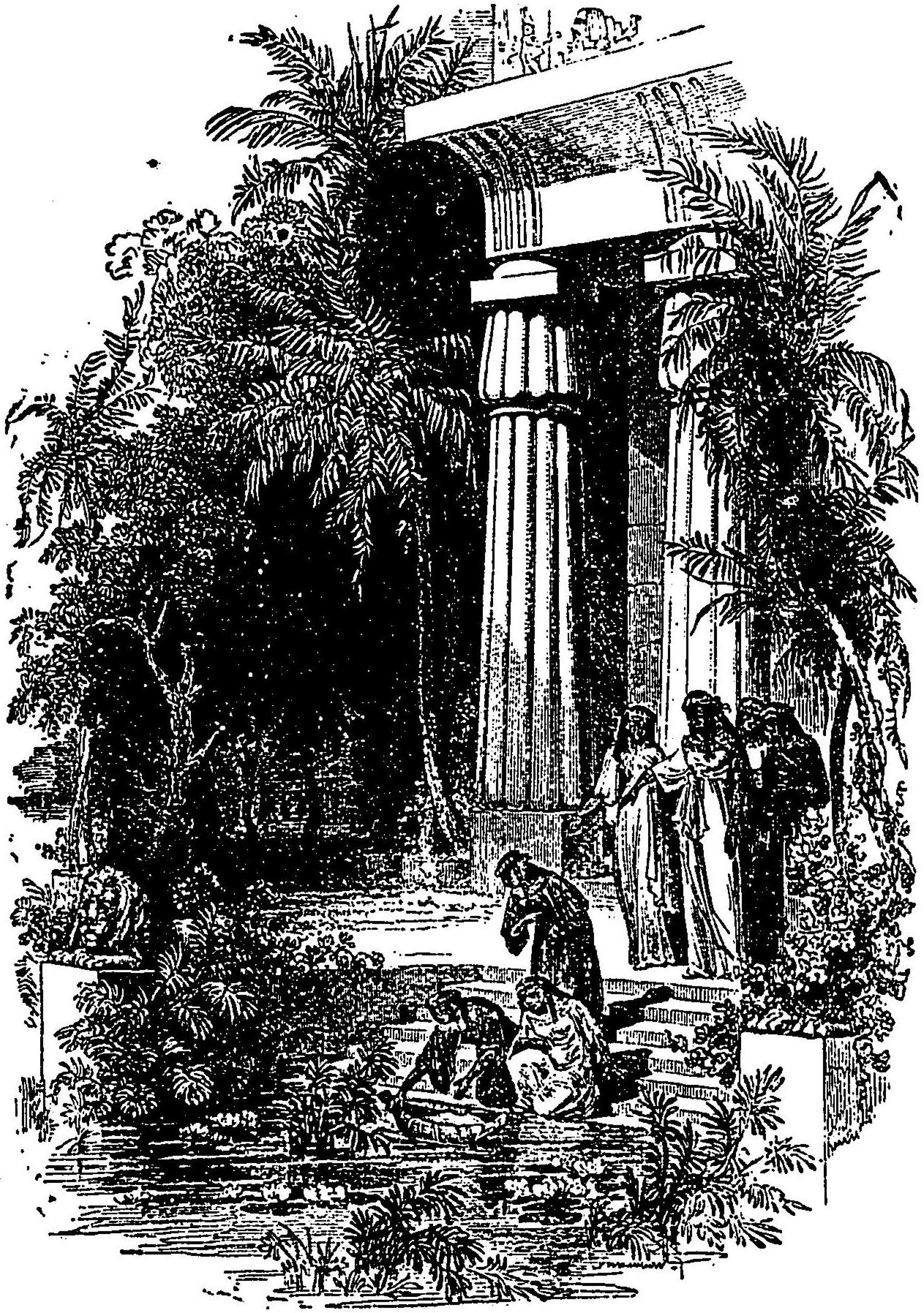
を得ず、然るに吾國未だ此等の書に乏しく、著者常に之を遺憾とせり、今や幸にして「ギエー、チー、ギユリキ」君、一貫楠瀬君の補助により、本書を編纂して世に公にするを得たり、幼童教育者の一助となるならば幸ひ甚し、勿論本書は人心を歡喜せしむる佳話妙文たるを期せず、著者はたゞ彼の野に呼はりしヨハネを以て自任するのみ、若しそれ完全の良書本書に後れ來るとあらば著者の喜び以て滿なるを得べし、

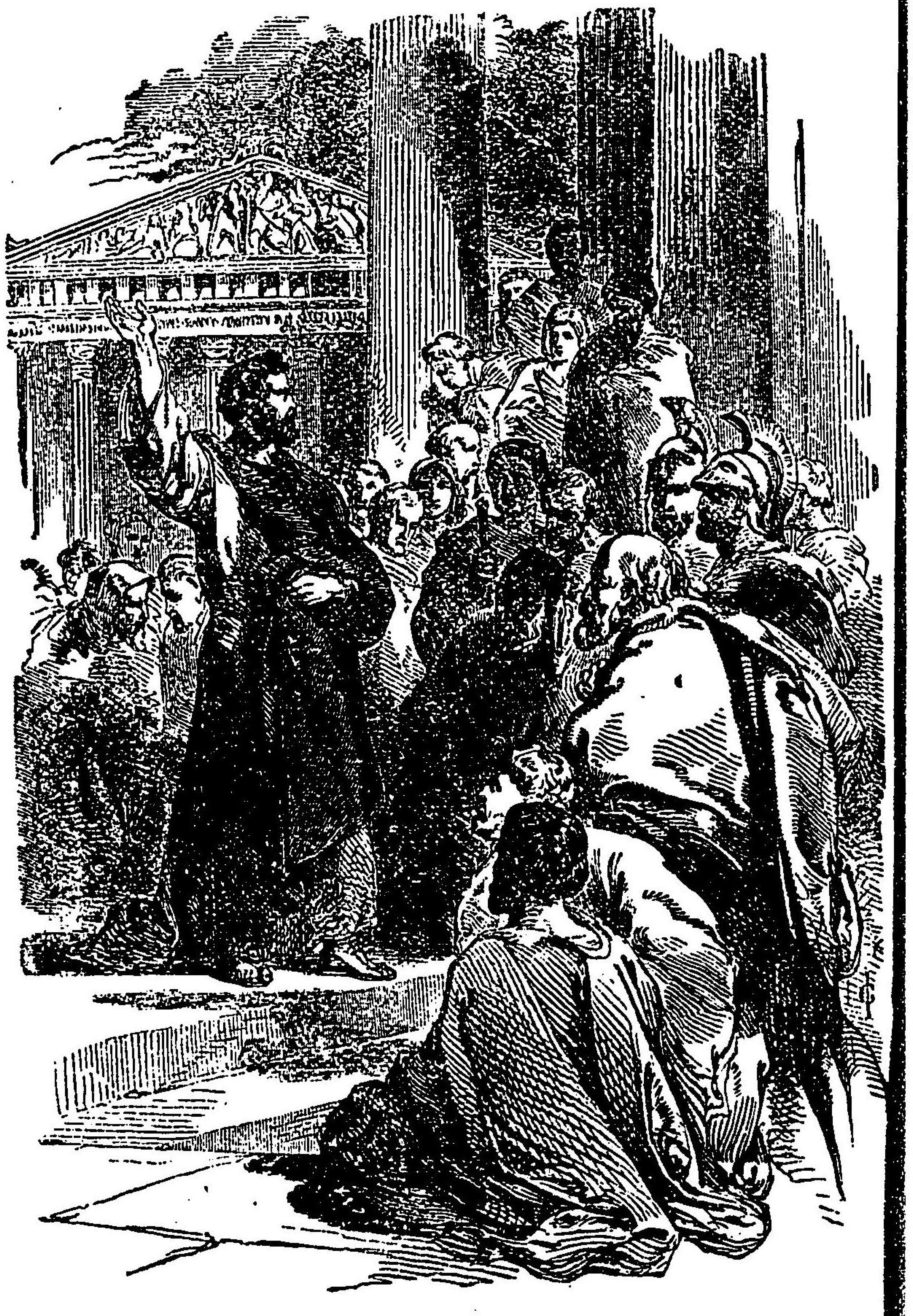
明治三十二年十二月　本間重慶識す

一本書材料は、著者が曾て諸書より拔萃して、安息日學校に教授せし者、或はニユートン氏ノ「バイブル、オーニング」「外國諸新聞」「聖書人名」「猶太地名書」「七一雜報」「福音新報」等より取れり、その七一、福音兩紙に掲載せしものは、主もに著者の著譯に係る、

一本書第一卷は圖書によつて教へ、第二第三第四第五卷は生徒の年齡學力に應じて應用すべき者なり、毎章の終りに單語を掲げたるは、教員が生徒に問題を發する參考として備へたるものなり、

一本書の目的は、幼年の時より信仰心を發せしむる必要なる談話を教へ、又は地名人名等を習熟せしめて、後來聖書を讀むに當り、理解に便ならしめんとするに在るなり、





安息學校讀本卷之三目次

○第壹章　忠儀ある番頭……一
○第貳章　ヨルダン河……四
○第三章　ジヨン、ハス……六
○第四章　自他相助く……九
○第五章　ダマスコ……十一
○第六章　「サドカイ」宗……十二
○第七章　惡念の結果……十四
○第八章　エペソ……十六
○第九章　ニコデモ……十九
○第十章　一錢の義金……二十一
○第十一章　アンテオケ……二十三

○第十二章　バルナバ……二十六
○第十三章　フランクリン……二十七
○第十四章　船長の慾心……三十
○第十五章　テモテ……三十二
○第十六章　無頼漢の悔改……三十四
○第十七章　天網漏るとなし……三十六
○第十八章　ジョージ、ホワ井トフヒールド……三十九
○第十九章　敎派の一致……四十一
○第二十章　アレキサンドリア……四十二
○第廿一章　キリスト……四十四
○第廿二章　「パリサイ」派……五十
○第廿三章　時は今なり……五十一
○第廿四章　イリアの頓智……五十三
○第廿五章　ロベルト前非を改む……五十五
○第廿六章　童子の辨解……五十七
○第廿七章　イスカリオテのユダ……五十九
○第廿八章　小女の義擧……六十一
○第廿九章　小女の頓智……六十三
○第三十章　慾心の大敵……六十四
○第卅一章　三友の區別……六十六
○第卅二章　カイザル……六十八
○第卅三章　一婦人の頑固……六十九
○第卅四章　神の慈愛……七十一
○第卅五章　短言……七十二

○第卅六章　カペナウン……七十五
○第卅七章　信仰と行……七十六
○第卅八章　ジョン、ウエスレー……七十八
○第卅九章　神の全能……八十
○第四十章　マコ……八十一
○第四十一章　樹木の大言……八十三
○第四十二章　偶像の無力……八十四
○第四十三章　ガリラヤ……八十六
○第四十四章　全力を以て恩人に謝す……八十七
○第四十五章　貧婦の四錢衆人を勵す……八十九
○第四十六章　ソドマ……九十一
○第四十七章　怠惰……九十二
○第四十八章　本心の價値……九十四
○第四十九章　羅針盤……九十五
○第五十章　アテンス……九十七
○第五十一章　一商人の謝罪……九十九
○第五十二章　英王ジョージ誤を悔ゆ……百一
○第五十三章　テサロニケ……百二
○第五十四章　聖書會社……百四
○第五十五章　ナザレ……百五
○第五十六章　時失ふ可からず……百七
○第五十七章　父親の悔……百九
○第五十八章　少女の信仰……百十
○第五十九章　マルタ……百十二

○第六十章　キリストの賜……百十三
○第六十一章　サムエル……百十五
○第六十二章　ソロモン……百十七
○第六十三章　ルカ……百十九
○第六十四章　アハブ王とエリヤ……百二十
○第六十五章　コリント……百廿二
○第六十六章　ショーザミユーロル……百廿四
○第六十七章　身を殺して人を助く……百廿五
○第六十八章　安息日戰爭の大敗……百廿七
○第六十九章　十誡……百廿九
○第七十章　貪慾あるアミンの失敗……百卅一
○第七十一章　母の愛心其子を取り返す……百卅三

○第七十二章　跛兒の仁心……百卅五
○第七十三章　盲女の献心……百卅七
○第七十四章　ソドムとロトの話……百卅八
○第七十五章　基督教の實力……百四十
○第七十六章　祈禱……百四十一

安息學校讀本卷之三目次終

安息學校讀本卷之三

本間重慶撰

第壹章　忠儀なる番頭

米國ミシガン州ノッピル街の大なる銀行にヒウド[illegible]番頭ありけり、年尚ほ弱けれども常に謹直律義の[illegible]にし、人々より信用を得、遂には大切なる金庫の鍵を預るとなれり、此金庫には、銀行の身代は固より、諸學校の預け金、寡婦の貯蓄金など藏めたれば、ヒウドは嚴重に之を監守し、常に肌に

り鍵を離さぬ程になせり、

二 然るに一夜其室に臥し居たるに、夜中過る頃七八人の強盗押入り、ヒウドを捕へて金庫を開かしめんとせしが、ヒウドハもし之を開かバ、自分も盗賊の汚名を蒙るべきを以て、斷然其命に應じ難しと云へり、されど盗賊等尚ほもヒウドを威嚇し、強て其命に應ぜざれバ一發の下に打ち殺すべしとて、胸にピストルを擬せしに、ヒウド少しも懼るゝ色なく、彼等の強求に應ぜざれバ、盗賊大に怒り直ちにヒウドを殺し、鍵を奪ひて金庫を開んとせしも、元來此錠ハ盗難を免るゝため、持主の外開く能ハざる樣に作られたるものなれバ、如何にこぜ廻るも開く能ハず、彼是する中追々夜も明けかゝりたれバ、盗賊等も不得止何處へか逃走りたり、

三 翌朝諸役員等起出で其部屋に入り見れバ、憐れやヒウドハ倒れ居たりて、一家の驚き言ハん方なし、而して金庫を調るに別條なし、是に於てヒウドハ必らず金庫を守りて死したるを知りしが、兩三日を經て強盗縛に就き、其夜の次第を委しく白狀せしにより、ヒウドの剛直明かになり、世上傳へて美談とせ

しと云ふ、
銀行　番頭　金庫　貯蓄金　ピストル　剛直

○第二章　ヨルダン河

一　ヨルダン河ハパレステナに在る著名の大河にして、北より南に流れテベリア海と死海を連接せり、河流屈曲急湍多くして、舟楫を通ぜる能はず、テベリア海ハ地中海より低きと六百五十三尺、死海ハ地中海より低きと千三百十六尺なり、故にテベリア海より死海に落る水路甚だ急激なり、

二　ヨルダン河ハ聖書歷史の記事に關せると多し、彼のイスラエル人がエリコに入んとする時河中に通路開け、またナーマンと云ふ癩病人、七度此の河水に浴して其の身潔り、又或人河中に鉄斧を落せしに、水上に浮びたるとあり、或ハイエスヨハネより此處にて「バプテスマ」を受けしとなどもありて、其名頗る高くなれり、

イスラエル　ナーマン　「バプテスマ」

○第三章　ジョン、ハス

一宗教改革者といへバ、皆必ずマルチン、ルーテルを推す、然れども彼の前既に數名の改革者ありて、身を犧牲に供せり、中に巨擘として數ふべきハ、先づ英國のウヰクリッフ、次にボヘミヤのジョン、ハスなり、ウヰクリッフはルーテルに先つ凡そ百五十年、ハスハウヰクリッフの後久しからずして出でたり、

二ハス千三百七十三年六月六日を以てボヘミヤに生る、父ハ寒貧なる農夫なりしも、或る方法を以て大學に入るを得たり、ハス學才あり常に人を驚歎せしめ、二十五歳にして大學の神學講師となり、其評判益す高く、歐洲諸國より來訪する者十年間二万人の多きに至れり、ハス夙に天主教の腐敗と僧侶の專横を憤りしが、當時ボヘミヤ王の姉妹、英國王リチヤード二世に婚し、両國間の交際親密に趣きしかバ、之を幸ひとして同國に渡り、曾てウヰクリッフが着手せし、宗教改革の有樣を實見し、尚その著書を得て之を見しに、慷慨悲壯の文字忽ち其の心を起し、斷然宗教改革の大業を實行せんと決心せり、

三然るに天主教徒ハ早くも其志を挫んと欲し、百方之を妨げしも、容易に制止すると能ハず、遂に捕へて火刑に處せり、ハス死に臨み、自若として揚言して曰く、「あゝ人々よ今日我を焼の火ハ他日全世界を照すの火なるを知らざるか」と、死する時年四十二、實に是れ千四百十五年六月六日にしてその誕生と同日なりしハまた奇なりと云ふべし、

宗教　マルチン、ルーサ　犠牲　ウヰクリッフ　ボヘミヤ　神學　天主教　火刑

○第四章　自他相助く

一スヰッツルランドハ欧洲中央の山國にして、高山峻坂多く、アルプス山の如きハ世界有名の高山なり、此山中行路難澁にして、冬期積雪の候にハ殊に甚しく、旅人の雪中に命を殞す者少なからず、

二嘗て一旅人あり殆んど絶頂にも達せんとする頃、風雪俄かに吹頻りて、進退自由ならず、且寒氣加ハりて身体冷へ渡り、氣力衰へて、雪中に伏し倒れたり、若し其儘眠り入たらバ、最早此世の人にあらざ

りしに、恰も好し他に一人の旅客あり、後より上り來り、之も亦寒氣に堪兼、已に倒れんとする場合なりけるが、先きに來りし旅人と、顔見合せ互に難澁を語り合ひしに、先れ者起て勇を鼓し、互に手をさし伸して、兩方の身体を摩擦せしに、双方共身体温まり、漸く氣力付きたり、

三 是に於て彼等再び進行を初め、大雪を凌ぎて、遂に難なく旅店に到着せしと云ふ、是ぞ自他相助けて事を爲し得べきの例証となすべきなり

アルプス山

○第五章　ダマスコ

一 ダマスコハスリアの首府にして、世界中都會の最も古き者なり、位置ハアンタイレバノン山の東なる沃饒の平野に在るバラダれ邊りに在り、使徒ポウロれ時此地に多くのユダヤ人住居し、從つて基督信徒も多かりし故、ポウロハ之を捕へんとして、往く途中忽ち改心し、使徒の職を受くるに至れり、

二 千五百○六年以後、此地ハトルコ領となれり、府内の人口一万五千余あり、年々遊覽の客、諸國より

幅輳して頗る繁華なり、此地は古より有名の貿易場にして、ダマスコと唱ふる毛布、幷に鋼、鐵、絹、木綿、箱細工、茸、砂糖漬等を産す、又近年英國より傳道師を派遣せしが、追々土人にして道を信ずる者起りたりと云ふ

スリア　アンタイレバノシ山　使徒　ポウロ　ユ
ダヤ人　トルコ　傳道師

○第六章　サドカイ宗

一　サドカイ宗ハユダヤ教中、無信の徒と稱すべき一派にて、其祖師サドイクより此名出たり、此派の人々ハパリサイ派の如く遺傳なる者を信ぜず、モーゼの五經のみを尊信せり、また靈魂の不滅、未來の賞罰あるを信ぜず、もと其祖師ハ來世あるを信ぜざりしにあらざれど、たゞ淺薄なる人智を以て十分之を知る能ハざると云しを、其派の人々誤りて、遂に全く來世なしとするに至れり、

二　此派の人ハ名利に奔走し、異邦人の隔なく交際すれども、パリサイ派ハ頑固なる鎖國主義にして、決

して異邦人と交るを好まず、又信仰上に於ても差違あるを以て、自然軋轢して、敵視するの風ありしなり

パリサイ派　モーセの五經　靈魂の不滅　未來の賞罰　異邦人

○第七章　惡念の結果

一　曾て三人の惡漢あり、常に心を合せて、善らぬ業をのみ營み居たり、一日連れ立ち往ける途中、大金の捨てあるを見出し、彼等大に喜びそのまゝ拾ひ上げて、近傍の森中に持ち行き、之を等分せんとせり、

二　時に皆空腹なりければ、その一人ハ食物を買ハんとて村里に出たり、而して彼往く道すがら思ふ樣、われ一人彼金を懷にせバ、如何に富裕に暮し得るならん、それ村に至れば毒藥を買ひ求め、食物に混ぜて、彼等に食ハしむべしと、

三　然るに森中の二人ハ、同時に談合して云へらく、もし彼れ一人なくバ、互の分け前大なるべし、彼歸り來らば直ちに殺すべしと、かくて一人の者ハ、思案を定め急ぎ歸りたるに、突然二人の者起り立ち、

抜手も見せず一撃に其場に彼を倒したり、

四 夫より彼等いと喜バし氣に、金を分ち、村より買來りし食物を食ひしに、食事終らざる前、忽ち苦痛を覺え、二人共に其場に倒れたり、あゝ三人の者即坐に生命を殞せしと、積惡の顯罰まことに恐るべきかな

〇第八章　エペソ

一 エペソハ小亞細亞の西岸に在りて、昔ハ甚だ繁盛の地なりき、此地に廣大なる神殿ありて、「アルテミス」を祭れり、「アルテミス」ハ女神にして、其体木にて造られ、胸部に數十の乳房あり、以て万民を養ふ力あるを示せり、殿堂構造の美麗なる、太陽の輝ける時遠くより之を見れば、目を眩すばかりなり、堂の長さ七十間五尺幅三十六間四尺あり、中に百二十本の蠟石柱あり、之を築造するにハ、二百二十年の日月を經過し、其間費せし所の金銀ハ、其高幾千万なるを知らず、堂内またアレキザンドル大王の像をも安置せり、其價二十万圓なりしと云ふ、

抜手も見せず一撃に其場に彼を倒したり、
四 夫より彼等いと喜バし氣に、金を分ち、村より買來りし食物を食ひしに、食事終らざる前、忽ち苦痛を覺え、二人共に其場に倒れたり、あゝ三人の者即坐に生命を殞せしと、積惡の顯罰まことに恐るべきかな

〇第八章　エペツ

一 エペツハ小亞細亞の西岸に在りて、昔ハ甚だ繁盛の地なりき、此地に廣大なる神殿ありて、「アルテミス」を祭れり、「アルテミス」ハ女神にして、其体木にて造られ、胸部に數十の乳房あり、以て万民を養ふ力あるを示せり、殿堂搆造の美麗なる、太陽の輝ける時遠くより之を見れバ、目を眩すばかりなり、堂の長さ七十間五尺幅三十六間四尺あり、中に百二十本の蠟石柱あり、之を築造するにハ、二百二十年の日月を經過し、其間費せし所の金銀ハ、其高幾千万なるを知らず、堂内またアレキサンドル大王の像を安置せり、其價二十万圓なりしと云ふ、

二 又市中に五万人を容るべき大演戯場あり、腰掛ハ皆大理石にて作れり、昔此處にて競馬、鎗術、撃劍等の技を演じ、或ハ戰爭にて虜とせし者を、猛獸と鬪ハしめたることあり、使徒ポウロ此地方に傳道せしに、人民皆驕奢放蕩また偶像邪神に事るを以て、ポウロを敵視し、殆んど死に至らしめたり、然ども更に屈する色なく、遂に一教會を設立するに至れり、

小亞細亞　アレキサンドル王　大理石

○第九章　ニコデモ

一 ニコデモハパリサイ宗の人にて、其身ハ富みまた學識あり、ユダヤ國々會の議員に列り、又律法の教師として頗る勢力を有したる者なり、嘗て一夜イエスの許に來り教を乞しことあり、是其教を慕しも、表にイエスに逢ハゞ、世より譏られんことを恐しによるなり、畢竟ざるに、義勇剛毅の心に乏きの致す所なれども、當時上流社會ハ概ね此の如き者なりしなり、

二 蓋し眞實イエスに從ハんとする者ハ、決して己の

利害を顧るの遑あらざるべし、さればイエスも「十字架を任て我に從ハざる者ハ、己が心に協ハざる者なり」と云へり、然ども主の十字架に釘られし時、彼アリマタヤのヨセフと共に來りて、其遺骸を請受け、埋葬せしとを以て考ふれば、後に公然その信仰を言ひあらハしたるものと見ゆ、遺傳によれバニコデモハ遂に道の爲に其官職を奪ハれたりと云ふ、

律法　上流社會　十字架　マリマタヤのヨセフ
官職

○第十章　一錢の義金

一　米國の或處に、ペレと云ふ小兒ありしが、其姉某ハ印度傳道を助くるため、義金募集れ手傳に奔走せり、時にペレに來り、應分の金錢を出して此擧を贊成せんとを勸めしに、ペレハ恰かも手に一錢の金を持ども、新しき獨樂を買はんとの積ありければ、空しく姉の願を斷りたり、

二　然るに暫くして退き考るに、異邦人の福音を求るハ、必ず己が獨樂を求るの情に勝るべし、と思付た

れば、猶豫せしが姉の許に至り、「これハ僅かのお金なれども、今自分れ貯るものですから、神さまの爲に差出しますよつて宜くお願ひ申します」とて渡したり、姉ハ悦びつゝ之を以て、一の小册子を購ひ、其金の由來を記して、印度宣教師の手に送りたり、

三　而して其宣教師の一人ハ、語學を習ふため、一士人を雇ひ居たるが、彼ハ其地の酋長にて少く英語を解する者なりければ、宣教師ハかねて送り來れる、彼の册子を借與しに、酋長ハ其中に記せる、册子代金の由來を讀て、大に心を動し、一册の聖書を購ひ、其を研究して遂に主を信じ、善良なる信徒となれり、其喜しさに、此酋長、一人の宣教師を、己が領地に連れ行き、四五年間傳道する事となりしに、遂に數百の土人道を信ずることゝなれり、是ベレが私慾を制したるの致す所、一錢金の結果また大ならずや、

義金　應分　獨樂　福音　印度　宣教師　聖書
私慾

○第十一章　アンテオケ

一新約書中アンテオケなる都市二あり、一ハ小亞細亞に在り、一ハ即ち今記せんとする者にて、スリアに在り、昔ハ最も繁盛の市街にして、山岳を越て四方に廣がり、繞らすに堅固の石壁を以てしたり、

二都の中央に大道あり、ヘロデ大王の修築する所にして幅一町長さ一里半、その兩側に圓柱を建て屋根を作り、美麗なる彫刻物を以て粧飾せり、其他水道湯沐場、演劇場等の設あり、昔し人民ハ競馬、賭博、踏舞等を好み、風俗淫猥にして偶像教を信奉せり、使徒ポウロ初めに道を此地に傳へ、非常の熱心を以て信者を作り、暫時にして教會を設立するに至れり、キリスト信徒が「キリステアン」れ稱を得しは、此處に初まりしとなり、

三その後此教會の監督に、イグチシアスなる者あり、四十年間傳道の後、捕へられてロマに至り、圓形劇場に於て野獸と鬪はされ、衆人の觀物となりて死せり

爾來此都ハ天災兵革等の難を經、今日に至りてハ住民の數、僅かに一万に足らざるといふ、

ヘロデ大王　水道　教會「キリステアン」

○第十二章　バルナバ

一バルナバハユダヤ國「レビ」の族にてクプロ島に生れ、初め名をヨセフと云しが、救主昇天後信徒となり、使徒等より此バルナバなる名を得たり、そハ「慰の子」と云ふ義なり、バルナバハ寛仁慈愛の心厚く、己が田畑を賣拂ひ、悉皆使徒等の足下に携へ來りて寄附せしとあり、

二ポウロ使徒となるや、共に相携へて四方に奔走し大に異邦人中に福音の光を輝かせしが、半途両人の間に激論起りて分離せり、然れども互に傳道の念に挑むとなく、又疑心を挾むとなく、後ち遂に交友舊の如くなりしと云ふ、バルナバ、ポウロの如き人にしてすら、此の如き過失あるを免れず、是れ人性の弱き所以なり、

「レビ」クプロ嶋

○第十三章　フランクリン

一千七百二十五年頃の事なりけん、年齢十九才許な

る一少年、忽然英京ロンドンに飄ひ來り、活計を立んがため、一日或活版屋に來り、使役せられんことを願へり、主人それ何處より來りしかを尋しに、少年ハ亞米利加よりして來れりと云ふ、

二　主人ハ彼れれ如何程植字の業に熟し居るやを試みしに、暫時にして「ナタナエル曰けるハ、ナザレより何の善者いでん乎、ピリポ彼に曰けるハ來て觀よ」と植へて持來れり、主人ハその怜悧なるを愛し、職場に雇ひたるに、少年ハ是より必死勉強し、通例職人輩の習として、酒を嗜み、金錢を浪費すべきに、此少年ハ少しも怠惰の擧動なく、謹愼正直に其職を盡し、多少の蓄財をなして本國に歸りたり、

三　其後彼ハ自ら活版所を開きて、盛大に事業を營み、或ハ著述者となり、新聞記者となり、郵便長となり、國會議員となり、米國獨立の時にハ、歐洲に派遣せられて、大に米國の國威を發揚せり、是れ抑も誰なるや、即ち彼の世に有名なるベンシヤミン、フランクリンの事にぞありける、

ロンドン　活版屋　亞米利加　ナタナエル　ナザレ
ピリポ　國會議員　米國獨立

○第十四章　船長の慾心

一　嘗て一大商船の船長あり、一度航海の途中破船の飄流しつゝ、男女の人々暗号をなして、救を求るを見受たり、然るに此船長ハ船を止めて、之を救はんとすることなく、船員共の勸めをも聞入ず、知ぬふりにて進行せり、

二　抑も何故然るかと云ふに、元來此船にハ多額の貨物を搭載し、其行んとする港ハ品切となり、非常の利得ある見込なるのみならず、同日出帆したる他の商船ありければ、もし猶豫する間に乘越されなば、折角の目論見も、水泡に歸すべきを以て、利慾のため義理も人情も打忘れたるなり、

三　かつ船長ハ後より、兎や角と批評せられんことを恐れ、船中の人々に金錢を與へ、其事を口外せざることを約束せしめたり、而して此船ハ他船に先ちて入港したれバ、案の如く其物品を鬻賣して、多額の潤益を得、俄かに富有の身となれり、

四　然るに其後彼れ常に不愉快に日を送り、其家ハ海岸に建ち居たるが、大風吹て浪躍る時ハ、當時難波

船の模様目前に顯れ、或ハ夢幻に其有様を畫き出しなどして、終身怏々苦悶に堪ざりしと云ふ、

船長　商船

○第十五章　テモテ

一　テモテハ性質柔和忠實謙遜にして、人々の賞讚を得使徒時代に在て、熱心福音を傳たる人なり、テモテルステラに生しが、父ハギリシヤ人なれども、母ハユダヤ人にて名をユニケと云ふ、元來ユダヤ人にして異邦人と婚姻するハ、大に嫌忌したることなれども、當時に至りてハ、その風俗盛んに行ハれ、またテモテハユダヤ人の律法を尊ぶの心厚かりしを以て、別に甚しく輕蔑せらるゝこともなかりしとぞ、

二　ポウロテモテを呼で「信仰に由るわが眞の兒」と云へり、蓋しもとポウロの導きにより、信徒となりし者なるべし、テモテ年少けれども、ルステラ、イコニオムの兄弟より尊敬せられ、又其生ハギリシヤユダヤ両人種に關係せる故、ポウロハ傳道の補助として、始終同伴せり、然れども、ユダヤ人と交際するに際りな

あらんため、之に割禮を授けたり、後ちロマ帝ドミシアンの時、遂に殉教者となりて死せりと云ふ、

福音　風俗　殉教者

○第十六章　無頼漢の悔改

一英國の或處にて、或日曜の夜、一人の説教者來りて説教せしが、殊の外能辨にして聽衆皆な感動せられたり、然るに説教終りて後、説教者ハ講釋臺に凭れ、手を組て暫時靜默沈思せり、人々之を見、もしや病氣の起りしにハ、あらざるかと心配せしに、其人忽然起ち上り云けるハ、「我友よ願くハ我言ふ所を聞き玉へ、今より十五年前の事にてありけるが、三人の惡少年あり、常に酒に醉ひ神を汚し、惡しきことのみ爲し居たりしが、彼等一夜説教を妨げ、且つ説教者に石を投付んとして、隱しに石を入て此處に來り坐せり、説教半ばにして其一人ハ、かゝる無駄言を聞くの遑なしとて、他れ二人に語り合つゝ、その一人を伴ふて出往たるが、尙ほ一人ハ終りまで聞居たり、其夜の説教者ハ嚴正なる人なりければ、其

説教にて強く彼の心を刺撃して、深く過越し方の罪を悔ましめ、遂に全く信者となるに至れり、其人こそハ今茲に起て、諸君に話する我なり、而して先きに出往し二人ハ悪念増長し、終に大盗賊となりて殺されたり、今より之を思へば、百感胸に溢れ、かくも罪深き此身を、道を説く一人となし給ひし、神の恩たゞ感謝するの外なきなりと、

日曜　説教者

○第十七章　天網漏るとなし

一　或處に一人の百姓あり、曾て隣家の主人を殺し、其財を奪ひ遠く跡を暗したり、地方の警察ハ人相書を作り、もし此罪人を見出す者あらバ、大なる報賞を與へんと告示せり、

二　後ち長の日月を經たれども、その在り家を知る者なく、罪人も亦安心して、一日故郷へ歸來り、彼地此地模様の變りたるを見廻りたる際、大雨俄かに降來りければ、雨宿りをせんとて、路傍の茶店に走り入りたり、

二　その時他にも同じく、雨宿りをせんとて居合せたる

者あり、互に火を焚きて、濕れる衣服を乾かせ居たりしが、その一人不圖前の壁を見るに、貼付たる古き新聞紙のあるを見たり、近づき見れバ二十年程以前、隣人を殺して逃げたる罪人の人相書なり、

三 彼其記事を讀て、奇異の想をなし、坐中の一人を見るに、少も其人相書に違ふ所なし、それより猶豫せず、警察署に密告せしに、直ちに探偵來りて其者を捕へ取調れ後、果して其罪人なるを發露せしと云ふ、あゝ天網ハ疎なるが如くなれども、遂に漏るゝ能ハざるなり、豈に深く懼れざる可けんや、

警察　人相書　新聞紙　探偵　天網

○第十八章　ジョージ、ホワヰトフヒールド

その説教の聲ハ二里四方に響き、手を擧て一言すれバ人皆泣く、是れジョージホワヰトフヒールドの事なり、ホワキトフヒールドハ紀元千七百十五年十二月十六日を以て、英國グラセストルに生る、早くオクスフォルド大學の教育を受け、二十一歳にして按手禮を受く、その主として傳道せしハイングランド、

アイルランド、ウェールスなれども、米國に渡りしと
七回あり、
二 千七百七十年九月三十日米國ボストン府の近傍ユ
ーベリーに於て眠る、その將に世を去らんとする時
病を冒して説教せんとす、人々之を止むれども聽ず、
「我道を説つゝ死するを最も好とす」と云ひしとぞ、其
生涯説教の度數ハ、一万八千度に上り、聽衆多き時
ハ二万人、少きも一万人に下らず、之を平均一万五
千人とすれバ、合計二億七千万の大數となるなり、

○第十九章　教派の一致

一、或人キリスト教徒の一致に付き語れるとあり、日
く吾曾て之を一水夫に聞く、二艘の英艦一夜海上に
逢ひ、互ひに誤て佛艦と認め、激戰曉に達せり、何
ぞ圖らん旭日東海に登るの頃よく〱見れバ共に味
方なる自國の軍艦ならんとは、是に於て相近き、互
に粗忽を謝して親和せしと云ふ、
二 信者の世に在る適ま意志の通ぜざるより、一派起
りて一派を攻撃し、全く仇敵の思をなすとあり、然

ども終に末日となり、此世の暗黒晴れ渡り、光り輝く天上に相會する時ハ、定めし同志打せし愚なるを悟り、相見て愕然するとなるらん、然れバ我等世に在る中、よく此事を考へ相勵みて、主の業を務んとを期し、愼で宗派分争の弊を避ざる可からず、

一致　水夫　軍艦　一派

○第二十章　アレキサンドリア

一　アレキサンドリアハ有名なるエジプトの都府にして、ナイル河より遠らず、地中海の濱に在り、紀元前三百三十二年アレキサンドル大王、ギリシャ人とユダヤ人を移住せしめて、建設せしにより此名を得たり、

二　アレキサンドル死して其死骸、此處に埋められたりと云ふ、爾來諸國れ商賈此地に集り、貿易繁盛人家稠密、ロマ府に次ぐの大都會となれり、後ち文化大に開け、東方諸國及びギリシャ、ロマの學者來集して、一時學術の淵叢となり、職業學校、博物館、書籍館、等起り、中にも書籍館れ如きハ、七十万巻れ書を藏

したりと云ふ、
三紀元後一百六十一年七十八人の學者相會し、ユダヤの聖書をギリシヤ語に譯せり、之を「セブチユルジン」と稱す、七十八譯の義なり、此地ハ紀元前二十六年頃よりロマの屬地となり、益す繁盛に趣きたるが、紀元後六百四十六年モハメツト教徒の手に落ち、爾來敗壞荒廢して、寂寞たる有樣となれり、

○第廿一章　キリスト

（一）

キリストに賴らずして教會に入を得るも、キリストに賴らで天國に入を得ず、○キリストハ万國に充滿せり又福音を畑とすれバ、キリストハ其中に隱れたる眞珠の如し、○福音を指環とすれバ、キリストハ其中に嵌たる金剛石の如し、○而して福音書中にキリストなかりせば、福音の善美榮光ハ何處にあるや、

（二）

ブルックスの言に昔英の女王マリア、新教徒を窘迫し時、一善良の婦人ありけり、ロンドンの監督ボンノル、之を召喚し問て曰けるハ、汝新教を棄、國教に

從ふにあらざれば汝の夫を奪ふべしと、婦答へて曰くわが夫はキリストなり汝之を奪去る能はず、監督曰く然らば汝の子を奪ふべし、婦曰くキリストハわらはの爲に十人の子に勝れり、汝又之を奪ふを得ずと、人若しキリストの我物なるを眞知せバ、心中如何なる艱難試惑に遭も、少も動さるゝと斯の如くなるべし

(三)

東印度に一教師ありけり、一日今や將に世を去んとする婦人に向ひ、臨終の感情如何なるやを問ひしに、婦人微かなる聲を出し、「福なり〳〵」を答へ、また脆弱き手を聖書の上に置き、キリスト茲に在り、次に胸に手を置きキリスト茲に在り、次に天を指しキリスト彼處に在と云しとぞ、

(四)

一紳士あり常に己の富貴に誇れり、一日友人の來るに會し、近傍を指點して此ハわが所有地なり、彼も然り、又遙かに彼方を指し、彼地彼家も我所有なりと云へり、友人靜かに答へて曰く、彼村に一人の貧婦あり、其富貴なる足下に万倍せりと、紳士愕然其

故を問ふ、友人答へて曰く、彼ハ常にキリストを其所有となせりと、

（五）

クリソストム曾てロマ帝の前に引出され、若しキリストを棄ざれば、遠嶋流竄の刑に處すべき旨を傳へらる、彼毅然屈せずして曰く、世界ハ神の家なり、陛下此身を遠島に放謫するもキリスト我を離れざるなり、帝曰く然らば汝を誅戮すべし、答て曰くわが生命ハキリストと共に隠れたり、陛下また如何ともする能ず、曰く然らば汝の財産を沒収すべし、答て曰くわが財産ハ天に在り、陛下之を左右するを得ず、又曰く然らバ汝を友人より離別せしむべし、答へてキリストハ吾友なり、陛下如何で之と別つことを得んやと、

（六）

人間に靈魂あり、家に礎あり、鎗に鋒尖あり、劍に刃あり、樹に果實あり、太陽に光あり、もしそれ説教にしてキリストなくば、猶ほ靈魂なきの人、礎なきの家、鋒光なきの鎗、刃なきの劍、果實なき樹の如く、何の價値もなし、又光りなきの太陽の如く何

を以て世を照さんや、

マリア　新教徒　監督　國教　東印度　臨終　一

紳士　遠島　財産

○第廿二章　「パリサイ」派

パリサイ派ハ古ヘユダヤ國の一宗旨にして、イエスの頃人心を統御跋扈せしとハ、恰かもルーテルれ頃、天主教が欧洲諸國の人心を支配せしが如し、此派ハ舊約聖書を尊信し、救主の降臨を待たれども、鎖細の事を先にして、大体切要の事を後にし、内部を粗畧にして、外面粧飾を専一にし、或ハ古傳を貴ぶと聖書に勝り、全く舊約の教義を誤解せり、故にイエス世に臨りし時、大に其僞善と誤謬を痛斥せしに、彼等ハ少しも反省せざるのみならず、反つて憤怒疾惡の念を熾し、罪なきイエスを捕て、十字架に釘るに至れり、

宗旨　舊約聖書　救主　古傳　僞善　十字架

○第廿三章　時ハ今なり

一一小兒ありけり、吾猶ほ幼少なり、蹴鞠、紙鳶の遊戯に遑まなし、成人の後にて靈魂上の事を考ふべしとして、等閑に付し去りしが、彼成長して青年となるや、今ハ商業に暇なし、十分金錢を蓄て後、キリストに從ふべしと云へり、其身やゝ富み榮へ、且二三人の小兒を持ち、益々多忙となりければ、其小供成長の後まで延引せり、小兒等成長して、獨立の人間となるや、又云らく遠からず、吾世事より脫離して、隱居の身となるべし、其時こそ年來氣掛りの事を仕遂べしと、然に圖らず一朝病に罹り、遂に神を知る能ハず、望なく喜びなく、憐れなる有樣にて、世を去りしとぞ、

蹴鞠　紙鳶　靈魂　青年　商業　隱居

○第廿四章　イツプの頓智・

一ザンツスといへる人其奴僕イツプに命じ、來客あるを以て市に往き、最良の珍味を求め來りて供へよと云り、かくて主客坐定り食せんとする時、卓上を見れば諸種の料理皆な舌を交へざるなし、主人大に

怒り、直ちに僕を召し詰て曰く、吾汝に命ずるに、最良の珍味を買ひ來るを以てせしにあらずや、此品果して珍味と云べきか、僕答て曰く我謹で命を奉ぜり、世上未だ此品の如く最良なる者なし、學術を研究し、眞理を講説し万衆を訓戒し、社界政治を組織てる、皆是れ三寸舌鋒の働にあらざるはなしと、

二次日主人又彼を苦んとし、更に最惡の物を買ひ來るべきを命ず、僕再び舌を買ひ來り、主人の詰問に答へて曰く、僞を語り、神を汚し、或ハ爭亂を起す、皆な是れ此に基す舌ハ實に禍の根なりと、主人其奇警に感歎せしと云ふ、

眞理　社界　政治

○第廿五章　ロベルト前非を改む

一ロベルトと云ふ小兒ありしが、平生行儀正しからざるを以て、其父母ハ晝夜教訓したれども、中々聞入るゝ色なし、一日他の惡童と遊べるを見たるが、両親心に憂へけれども、戒るとも聞入ざれば別に何とも云ず、たゞ彼を呼び來り、良き林檎六を皿に盛

て與へしに、ロベルト大に喜び、其儘戸棚に入置り

二 翌朝父ハ三の腐れたる林檎を持來り、其良き林檎と與に置しかバ、ロベルト大に怪み、此悪き物を良き物と共にせば、必ず善き物をも腐れしむべしと云へり、父答へて汝然な思ふな、何故新き物腐れたる物を新にせざるなと云ひ、其儘戸棚を閉たり、其後三日を經て、之を開きたるに、林檎ハ皆腐敗して臭氣堪へ難し、ロベルト見て大に之を惜み、父に向て不平を鳴せり、

三 其時父笑を含み静かに説きて曰く、吾亦常に汝を惜み、悪友ハ遂に汝を腐敗せしむるを教ふれども、汝之を聞入れず、今此林檎を以て汝悟る所あるべしと、是よりロベルトハ前非を悔い、全く悪友と絶しかバ後ち善良なる人となりしと云ふ、

行儀　林檎

○第廿六章　童子の辨解

一 或る田舎に十二三歳の小兒ありて、常に日曜學校に往きて教を受け、堅くイエスを信じて、其性質頗

る優しき者なりき、其處に一人の學問に誇りて、神を信ぜぬ者ありけり、此童子を嘲弄して問けるハ、小兒よ汝ハ常に日曜學校に往て、神の教を受と云ふ如何にして汝ハ神の在る事を信ずるや、

二小兒惑ふ色なく優しく問ひ返して曰く、「今足下に問ハん、抑も鷄れ卵ハ何より生れますか、其人笑ひながら答て曰く、固より牝鷄より生るゝなり、小兒曰く然らば牝鷄ハ何より生れますか、答へて曰く其ハ汝も知れる處なり、小兒尚問て曰く卵と牝鷄と孰れが前に生れましたか、牝鷄卵を生ましたか、又ハ卵牝鷄を生ましたか、牝鷄が卵を生んだでござりましやう、然らば牝鷄ハ何より生れましたか、必ず之を造りし者があるはづです、是が則ち神さまでござります、故に私ハ神の在すとを信じますと、其人答ふる能ハず默して去れり、

○第廿七章　イスカリオテのユダ

一十二使徒ハ大低世より、輕蔑せられたるガリラヤ人なりしが、此ユダハユダヤの産なりし、彼ハ後ち

その師を賣たれども、初め使徒等の信用を得、會計を司り、共に傳道して奇跡を行ひたるとあり、然るを何故後來かゝる大罪を犯したるか、蓋しもと左程の惡人ならざりしも、貪慾の性ある上に、始終金銀を取扱ひしかば、其心增長して、遂に爲すに忍びざる程の事をも、忍んで爲すに至りしなるべし、

二 而して彼其儲たる金を以て、慾を恣にせんとせしも、良心の責を蒙り、慚愧に堪がたく、直ちに祭司の許に至り、その金を還さんとせしに、之に應じ吳れず、最早思ひ迫りて、淺ましき死を遂げしものなり、

會計　奇跡　祭司　ユダの死

○第廿八章　小女の義擧

一 一燈臺の番人あり、一人の娘と共に常に燈臺の中に住せり、其娘は性質篤實温和にして、よく父に事へり、一日父は海上に漕ぎ出しに、海賊來りて之を捕へたり、蓋し賊思へらく、もし燈臺番を縛して歸さゞれば、夜に入るも点燈する能はず、其時海上を

通過する船ハ、暗礁に乗上げ、其の機に乗じてその搭載せる貨物、皆な吾有となるべしと、

二　而して娘ハ父の歸るを待わびたれども、一向歸り來らず、海上夕方の景色何となく物淋く、何か考へ居たる時、不圖心付きて思ふよう、もし今夜父歸るとも遲く、燈臺に点火せざれバ、海上の船舶危險に陷るべしと、是に於てかひぐしくも、自ら火を手にして燈臺に上りて点火せり、之がため海上多の船舶ハ、恙なく航海するを得、折角海賊の企も、全く水泡に歸したりと云ふ、それキリスト信徒ハ世の光なり、故に日夜怠りなく其光を輝かし、世の人々を危難の暗礁より、救護せざる可らざるなり、

燈臺　海賊　点燈　暗礁　世の光

○第廿九章　小女の頓智

印度國にて一人の娘イエスを信ぜしに、近隣の者甚く之を嘲弄嫌忌せり、或時一の惡漢之を弄らんとし汝ハイエスを信じて何の德を得たるかと問へり、娘直ちに近傍より小虫を持來り、其周りに藁を積み、

之に火を点ぜしに、虫ハ中に在て大に苦み、將に死んとせり、其時手ら之を救ひ出し、惡漢に向て曰く私共もとハ罪惡の火の中に死なんとせしものなるに神さまハ手を伸して救ひ出し被下たり、是れ神さまの大なる恩なり、それだから神さまに信仰せねばなりませんと、

印度國　惡漢

○第三十章　慾心の大敵

百万の大衆を率ひ、天下を蹂躪するの英雄にても、己れ自身の慾を制服するハ、至難の事なりと見ゆ、昔マセドン王アレキサンドルハ、ペルシヤの大軍を討破り、天下また敵する者なかりしも、己が情慾にハ勝つ能はず、酒の奴隷となりて、それが爲身の禍を惹起せり、ローマの大將シーザル（カイザルの事）ハ、數百千度の戰に勝を得、威名天下に轟きたるも、己の慾心增長して、帝王の位に登らんとし、遂に議事堂にて刺殺されたり、佛の大帝ナポレオンの、セントヘレナに流さるゝに至しも、もと是厭くを知らざる慾心よ

り起りたる事なり、然らバ世に眞實神を敬愛する者に非ざれバ、決して自己の慾に勝つ能はざるなり、

天下　英雄　アレキサンドル　奴隷　シーザル

議事堂　ナポレオン　ヘレナ島

〇第卅一章　三友の區別

或人罪の嫌疑により、法衙に召喚せられたるが、此人平生三人の親友あり、其一人ハ吾れ汝を助んとて途中まで同行し、他の一人ハ同じ意にて、法衙の門前まで同行し、また他の一人ハ法廷に出て、厭まで、其身を辨護して、たとひ罪せられて牢獄に投ざるゝも、常に慰めいたハるべしと約せり、此三人の爲す所ハ恰も此世の富貴と朋友と神とに似たり、人の富貴を得るや暫時にして消失す、又朋友ハ賴母しき者なれど、墳墓に呑るゝときハ、如何ともすべからず、唯神ハ始終吾と偕に在り、現世來世變る者に非ず、

法衙　辨護　牢獄　富貴　朋友　神　墳墓　現在　來世

○第卅二章　カイザル

一カイザルハ昔しロマ國にて、名高き貴族の姓なりし也、後ちロマ帝の稱号となすに至りしなり、カイザルの中には豪傑もあり、殘忍無道の者もありたり、最も顯著なるハガヨス、ジユリアス、カイザルにて、昔のアレキサンドル、今代のナポレオンと併せ稱して、西洋の三傑と云ふ、

二彼れ戰へバ必ず勝ち、攻れば必ず取り、遂にロマの大權を掌握し、帝位に登らんとするに至りしが、叛黨ブラタス等の爲に刺殺せられたり、之に次で名

高き者をオーガスト、カイザルと云ふ、ロマ帝王中の卓越なる者なり、其他最も暴惡なる者ハ、ニロ、ドミシアン、ジユリアン、カイザル等にして、其猛惡の行爲ハ歴史上明白なり、

貴族　豪傑　ナポレオン　ブラタス　歴史

○第卅三章　一婦人の頑固

一一老人暴風雨の夜、奥山なる縁家より歸りけるが、途中一婦人の坂路をたどりて往くに逢り、老人親切

にも其婦に對ひ、此雷鳴甚しく暗黑咫尺を辨ぜざるに、獨行せらるゝハ最と危し、之より吾と同行して、先なる宿屋に至り、明朝歸宅せらるべしと云しに、婦否みて決して氣遣ひ玉ふな、妾ハ幼少の頃より、よく此道に慣れたりと云ふ、

二 老人尚も危み、然らバ途中踏違て、谷底に落ることあるも計られず、此提灯携へられよとて渡さんとせしに、婦人少しも肯んぜずして獨行せしが、案の如く、谷底に落ち、翌朝谷底より其死骸を見出されたり、世にハ只己の力を賴み、頑固にして神の光を退け、終に千仞不測の壑底に陷る者あり、豈に歎ハしきことならずや、

緣家　雷鳴　宿屋　提灯　神の光

○第卅四章　神の慈愛

一 爰に極めて貧乏の人あり、貴重なる器具を買求んとするも、即坐拂ふべき金なきを以て、確實に證書を認めて賣主に渡し、其品を持歸らんとす、

二 若し數百万圓の財產ある者、此證書を認しならば、

誰とて疑ふ者なかるべしと雖も、此の如き貧乏人の証書を、如何でか信用すべき、賣主ハ決て其品を渡さゞるなり、

三　それ神ハ慈愛に富み、我儕を救ハんためにハキリストをも與へり、然バ吾儕十分神に信用を置き全心全力之れを獻ぐべき筈なり、

○第卅五章　短言

悪に報るに善を以てするハ、石を投る小兒に、蔭を與ふる木の如し

常に智慧を尋る者ハ智者なり、又之れを得たりとおもふ者ハ愚者なり、

金剛石ハ泥中に落るも、價値を減ぜず、

塵ハ空に上ぐるも、價値を増さず、

僅かに十斤を背負ふ驢馬も、人畜を害する獅子よりハ遙に貴し、

十人の貧民ハ一枚の席上に坐せしむるも、二人の國王ハ廣き國土にさへも坐する能ハず、

神の恩により悪魔の子供が、生れ更りて神の子供と

なるハ、恰も鍛冶師の手を經て、粗鑛が最貴なる器具となるが如し、

暴風あらんを懼れて、船將航海を見合すなかれ、不慮の禍あらんを懼れて、滊車に乘るを嫌ふなかれ、損失を懼れて商人業を廢するなかれ、彈丸を懼れて兵士、戰塲に臨むを辭するなかれ、學術の難深を懼れて學生怠惰するなかれ、多の艱難辛苦あるを懼れてキリスト信者信仰を棄る勿れ、

金剛石　驢馬　帝王　粗鑛　彈丸

○第卅六章　カペナウン

カペナウンハガリラヤ海の西南岸に在り、イエス此地に留り、多の奇跡を行たるも、其人民少も教に心を留ざりしかば、此地を立去たり、近傍にコラジンベッサイダの二邑あり、此處にもイエス親切に傳道したれども、更に從ふの氣色なかりき、是等の地皆な衰亡して、今日ハ舊跡をも留めぬ有樣となれり、然れどもベッサイダハペテロ、アンデレの故郷にて、彼等皆な後來熱心道を宣傳ふる人となれり、また彼

のイエスが五のパンと二の魚を以て、五千人を養ひしも、此邑の近傍なりしと云ふ、

奇跡　コラジン　ベツサイダ　ペテロ　アンデレ

故郷　五のパン

○第卅七章　信仰と行

一或人友人と共に一人の舟子を雇ひ、涼を取んとて河中に出たり、不圖舟中に議論起り、一人ハ信仰を大切なりとし、一人ハ行を大切とせり、甲論乙駁中々決せず、時に舟子傍より裁判して曰く、殿達しばらくわたくしの言をお聞くだされ、今予ハ二本の櫂を持ちますが、一を信仰とし、一を行とすべし、もしたゞ一方を押バ、舟ハ一處に在り舞ふのみにして進まず、然れども同時に両方を押すときハ、快く前進すべし、

二是に由て考ふべし、信仰なしの行も、行なしの信仰も、共に無益なることを、此両者相兼て初めて天國の岸に達すべし、ヤコブの言にも「信仰も行を兼ざるときハ乃ち死るなり」と二人また論ざる能ハざりき、

行なしの信仰ハ羽翼なき鳥の如し、地上にもがくとも、天空に飛行く能ハず、

信仰　裁判

○第卅八章　ジョン、ウエスレー

一ジョン、ウエスレーハ一日山中にて、山賊に逢たれば、據なく其望に任せて、金を取せたり、山賊去らんとする時、ウエスレー之に對ひ、われ一言殘し置くことあり、イエス、キリストの血、吾儕を潔め給ふとを記憶せよと、

二後ち數年ウエスレー一會堂に說教したる時、一人の男出で來り、足下ハ日外追剝に逢ひ、然る〳〵の言をなせしにあらずやと、ウエスレー答へて、そハ吾なりと云ふ、其人涙を流して曰く、吾こそ其山賊なりしが、其後大に君の言に感じ、遂に罪を悔改め、正業に移ることを得たりとて、共に神を感謝せしと云ふ、

山賊　會堂　說教

○第卅九章　神の全能

一或人最愛の子ありけるに、果敢なく病死せり、其両親大に悲み、神の無慈悲を怨つゝ、牧師の許に來りて、何故神ハかく殘酷なる事をなすやと問ひたり、牧師徐に答へて曰く、全能全智の神ハ、君等及び愛子の幸不幸をよく知りて、其間を離別せしめしなり、

二たとへて云んに爰に牧羊者あり、新しき牢を作りしに、二匹の親羊ハ之を嫌ひて逃んとす、牧羊者分別をなし、先づ其子羊を入しに、親羊も恩愛の情に牽され、後より走り入たり、今此牧羊者ハキリストにして牢ハ天國、羊の親子ハ君等親子なり、神ハ君等を天國に入んとて先づ愛子を取て誘へるなり、よく心を變て神の招きに應じ給ふや否と云ひしとぞ、

牧師　全能全智　牧羊者　天國

○第四十章　マコ

マコハ馬可福音書の記者にて、一の名をヨハ子と云ふ、蓋しヨハ子ハユダヤ國に用ひし名にて、マコハロマ國に用ひし名なり、曾て使徒ペテロ獄を免れ、

マリアの家に入り、多れ人尋ね來りし時、マコも其中に在りて、大に信仰を起せしものと見ゆ、其後ポーロ、バルナバと共に、小亞細亞地方に傳道し、後またポウロと共にロマ府に居りしとあり、而して後ちバビロンに往き、使徒ペテロを助けて道を傳へ、常に彼の書記となれりと云ふ、其後またアンキサンドリアに赴き、其教會を牧し終に道の爲に殉ぜしと云ふ、

福音書　ロマ國　バビロン

○第四十一章　樹木の大言

一 或處に深く茂りたる森林ありしが、一日林中の樹木互に爭を始めたり、一木誇り顔に、吾ハ林中にて一番高く、遙かの空中に聳へるなりと云ひしに、一木またこれ劣らじと吾ハ一番美麗なりと、一木また横合より、吾ハ高くもなく美くしくもなけれども、よく大風に耐へて挫折せらるゝことなしと、又一木ハ側に在り誇り顔に、吾の葉色を見よ、鬱々青々四時色を變ぜず、霜雪の暴威も吾を害する能ハずと、

二 時に林主斧を手にし來り、用捨なく片端より伐木

し、悉く薪となせり、人も亦然り、神より見るとき
ハ土塊に過ず、是を之れ祭せずして、互に長所に誇
りて相爭ふハ、また愚妄の甚きにあらずや、

○第四十二章　偶像の無力

一印度にてキリスト教の一教師、一日ルスヲと云ふ所に偶像を見物せんとて往けり、時に宮の戸ハ閉ぢられ、一人の參詣者もなく、戸前に一人の神主居るを見受たり、教師ハ怪み何故かく寂しくて、宮の戸を閉たるやと問へり、

二神主答て近來盜賊多く、此宮の神器を窺へば、吾日々來りて神を護るなりと云り、教師また誰か神の物を盜去るかを問しに、ブラミン族の人、此神を拜む態して此に來り、此神の右手に持せたる玉を盜み去りたれば、なほ左手の玉をも盜まれんことを恐れて、かくハ護衛するなりと云ひしとぞ、神ハ人を護るべきものなるに、反つて人に護らるゝとハ憐むべき神ならずや、

○第四十三章　ガリラヤ

一ガリラヤハイエスの頃にハヨルダン河の西、サマリアの北なる地方を總稱せし名なりき、北方ハ山岳多けれども、南方ハ平坦にして地味肥へ、四百餘の市邑ありて、孰れも人家稠密せり、中にもテベリア、カペナウム、ナザレ、ツロ、シドン等ハ、聖書中多く記されたる處なり、

二昔しツロ、シドンの近傍ハ、多くアラビヤ人住居して偶像教を奉ぜり、故に此地方を稱して異邦人のガリラヤとも云へり、又イエスの十二使徒ハ多くハガリラヤより出し故、イエス及び是等の人ハ賤められて、ガリラヤ人と呼れたり、イエスハ三十の齡に達るまで此地に住ひたり、

ヨルダン　サマリヤ　偶像　異邦人

○第四十四章　全力を以て恩人に謝す

一一貴人あり、一度航海中誤つて甲板より海中に陷落せり、其時一人の水夫直に海中に飛入り、辛ふじて之を救上たり、やゝありて其人氣付たる時、眼を

見開き大聲にて、吾が生命の救護者ハ誰なるかと問ひしに、傍なる一人其水夫を指示せしに、彼れ直に隱しよりあらゆる金錢を攫出し、水夫の前に置き、吾今ま足下の救護により、幸に生命を繋ぎたり、此少許の金錢固より高恩の万分一だも報ずるに足らず、たゞ微志の在る所を表するのみと云り、

二 而して其金高ハ幾許なりしか。今より知る由なけれども、其所有金を悉皆投出せしに相違なし、吾儕人類ハもと罪の大海に沈み、望なき者なりしに、キリスト十字架の贖に由て生命を得たり、然れば全心全力を以て神に奉ずべきとならずや、

航海　甲板　水夫　十字架

○第四十五章　貧婦の四錢衆人を勵す

一 名高き説教者ドクトル、ペースン氏、聖書會社のため寄付金を募らんとて、彼地此地演説してあるきけるが、一日或片田舎にて殊勝なる盲目の一婦人に出逢り、婦人來りて曰く、わらハ、嘗て先生の御演説を承り、何かな聖書會社のため寄付したく思へど

見開き大聲にて、吾が生命の救護者ハ誰なるかと問いしに、傍なる一人其水夫を指示せしに、彼れ直に隱しよりあらゆる金錢を攫出し、水夫の前に置き、吾今ま足下の救護により、幸に生命を繋ぎたり、此少許の金錢固より高恩の万分一だも報ざるに足らざ、たゞ微志の在る所を表するのみと云り、

二 而して其金高ハ幾許なりしゐ、今より知る由なけれども、其所有金を悉皆投出せしに相違なし、吾儕人類ハもと罪の大海に沈み、望なき者なりしに、キリスト十字架の贖に由て生命を得たり、然れば全心全力を以て神に奉ざべきとならざや、

航海　甲板　水夫　十字架

○第四十五章　貧婦の四錢衆人を勵す

一 名高き説教者ドクトル、ペーズン氏、聖書會社れため寄付金を募らんとて、彼地此地演説してあるきけるが、一日或片田舎にて殊勝なる盲目の一婦人に出逢り、婦人來りて曰く、わらハ嘗て先生の御演説を承り、何かな聖書會社のため寄付したく思へど

も、貧院に養ハるゝ身の、如何ともすべき様なし、今蓄ふ所僅かに四錢あり、殘らず之を寄付して寸志を表すべしと、

二ペーソン之を聞て感歎止む能ハず、到る處必ず此婦の事を談ぜしに、之に感激して數千金を喜捨する者、續々起りたりと云ふ、是れ聖書に謂ふ所の「小さき火の大なる林を燎す」ものにて、其死後永く美譚として傳へられ、多くの志を勵し、以て數百千万の靈魂を救へり、

ペーソン　聖書會社　寄附金　演說　貧院

○第四十六章　ソドマ

ソドマハ平野に建られたる一市邑にして、昔しアブラハムの甥ロトの住し處なり、其頃住民ハ大なる罪を行ひ、神に逆らひしかば、神ハ天より硫黄の火を降して、同く罪の業を爲したる、近傍のゴモラ、ゼボイム、アダムの諸邑と共に焼亡したり、

二もと此邊の地ハ豐饒にして、人世の天國とも云はれたるに、罪の爲にかゝる憂目に逢へり、神ハ決して侮るべき者にあらざるなり、其後地中より水湧き

出て死海となり、今日に至りて此市全く迹形もなきことなれり、

硫黄　人世の天國　死海

○第四十七章　怠惰

一　世に恐るべき者多くある中に、最も恐るべきハ怠惰なるべし、怠惰ハ人をして義務を欠かしめ、又半途にして其事業を廢せしむ、　ソロモン曰く怠惰ハ人に襤褸を被する者なりと、

二　キリストユダヤ人に對つて曰く、わが父ハ今に至るまで働き給ふ、我もまた働くなりと、是れ神ハ創世より、以來數千年の今日に至るまで、晝夜間斷なく万物を保護し、少しも怠ることなしとの意なり、

三　見よ太陽ハ神之を創造りし以來、今日に至るまで暫時も休むことなく、世に其光を放ち万物を生育せるに非ずや、以て知るべし、怠惰ハ極めて神の意に背けることを、

義務　ソロモン　創世

○第四十八章　本心の價値

一　人に本心なる物あり、神吾人に付與せる物の中に最も大切なる者なり、本心は吾儕に善を為すを奬め悪を避るを教ふ、故に本心の告る所は、取も直さず神の勅令と知るべし、我儕の幸不幸は、之に從ふと否とに關ず、我儕もし善事をなせば快樂を覺へ、悪事をなす時は不愉快を感ず、彼イスカリオテのユダが縊て死せしは、本心の咎の禁ざる能ざるによる也

二　もし我儕其時彼の傍に在り、その本心の聲を聞を得ば必ずかくの如く言しを聞ん、「汝は不義の悪漢にして、最も人の恥べき業を忍んで為せり、汝世に存命すべき者に非ず、汝此儘なるときは、見る人逢ふ人汝を指して辱むべし」と

本心　刺令

○第四十九章　羅針盤

一　爰に一の羅針盤あらんに、其大さ六インチばかりの圓形の箱にして、上はガラスを以て蓋ひたり、尚

は其内部を吟味するに、白紙の表面に東西南北の方位を記し、又之を指す射線あり、箱の中心に鉄片あり、其形平き針にして、他の鉄針の上に平浮せり、而して此針ハ如何なる場所に行くも、其指点ハ常に北方を變ずることなし、此性質を稱して磁石力といふ

二此磁石力ハ如何なる者なるか、未だ十分に知る能ハず、然れども此針の常に北方に向ふとにより、海中航客が、其方位を定る爲に、必須の器具となれり、もし其針より北方を指すの性質を除き去るときハ、無用の器となるべし、さて我儕此小き器械によつて大に學ぶべきことあり、我儕常に善事を爲ときハ、世の人皆わが正きを知りて、之に習ふべし、もし惡事をなすときハ、恰かも磁石力の其性を失ひて、水夫の用をなさゞるごとく、天與の美質を失ひて、無用の人間となり果べし、

羅針盤

○第五十章　アテンス

一アテンスハコリントの東二十里に在り、市街ハ平

地に在り頗る美麗にして、石壁を以て圍めり、街の中央にアクロポリスと云ふ小丘あり、丘上ミチルバなる女神を祭る、市人之を守護神として崇敬を盡せり、其神像ハ唐銅にて作り、高さ十一間四尺、二三里の遠きよりハ、之を見ることを得べし、

二 其他有名の偶像夥多あり、昔ハ都民學術に達し、禮義を守り、盛んに學校を設け、世界文明の中心たりき、ポウロ此地に來り、アレオ山に上りアテンズ人に向ひ、天を造り地を造りたる神ハ、人の作りたる宮に住まはざることを、教へたることあり、

コリント　アクロポリス

○第五十一章　一商人の謝罪

一 嘗て信者なる商買人あり、其友に尋て曰く、我店に多くの番頭あり、之に道を傳へ教會に入らんことを勸れども、未だ一人として信者となりし者なし、是れ如何なる故ぞやと、其友答て曰く、予考る所を述べし、予が無禮を咎るなかれ、予平生足下の氣質を見るに、やゝ短氣にして怒り易き癖あり、故に足下の番頭等ハ常に足下の勸めの善きと、其宗教の良き

を知れども、足下が言行一致せざるより、彼等礙を起して信者とならざるなりと、
二商人此言を聞て少しも怒ることなく、大に其身の足らざるを悟り、獨り部屋に入て神に謝罪し、尚ほ神の恩惠の人に加り、其恩を受る樣祈禱し、翌日店に出で、多の番頭を呼寄せ、其信仰れ不十分なりしを詫び、尚ほ彼等に信仰に進むべき樣、勸めしかば、其後番頭等も自らの頑固なりしを悔い、遂に信者となりしと云ふ、信仰と行の一致せざる可らざる此の如し、我儕よく〱思ふべき事なり、

○第五十二章　英王ジョーヂ誤を悔ゆ

英王ジョーヂ四世、曾て一日晩餐禮を守らんとし、使を遣してウエストミンストルの監督を招らしめたり、使者途中に王命を怠りて、遊び居しかば大に延引せり、監督來りし、時王其遲がりしを詰問せしに、答へて自分が來るの遲きに非ず、使者怠慢せしと云へり、王聞て大に怒り、使者を呼付けて大に叱り、其儘監督を伴ひ行て、聖餐を守らんとせり、時に監督靜に王を諫め、陛下若此嚴肅なる聖禮典を守らん

とせバ、憤怒嫉惡の心を避くべしとて、之を守るを拒みたり、是に於て王ハ己が過激なりしを悔い、其使を呼び其罪を免し、然る後靜かに其禮を守りしと云ふ、

晩餐式　監督

○第五十三章　テサロニケ

一テサロニケハマケドニヤの一市街にて、アレキサンドルの妹の名を取て、此街に名けしものにて、古より繁盛にして有名なるコンスタンチノープルに次ぐ處なり、市街ハ海濱に建られ、商賈の通路に當りたれば、基督の福音を傳ふるに甚だ便利なりき、ユダヤ人多く此地に住居せしを以て、ポウロ其會堂に往て、三度ほど安息日に說教せしとあり、追々教に從ふ者出しに、ユダヤ人大に之に反對し、ポウロを市外に放逐せんとせり、信者ハ早く之を前知し、窃かにポウロをベリヤに避しめたり

マケドニヤ　コンスタンチノープル　會堂

○第五十四章　聖書會社

一米國聖書會社ハ有志信徒相集リ、廣ク世ニ聖書ヲ頒たんとの、考より設立せる者なり、今其來歷を尋るに千八百十六年五月、初めてニユーヨルク府に之を創設し、僅かに幅一間長一間半の一間を借受て事務を取扱ひしが、其後日を逐ふて盛なるに從ひ、二間半四方の部屋に轉じ、尚ほ其後同府ナアソーストリートと云ふ街に、八間と十六間の家を借りて引移り、五六年を經て又手狹となりたり、

二遂に千八百五十二年寄附金を募り、アストルプレーと云ふ所に新築工事をなせり、是れ今日の聖書會社にして、其周りハ百二十間ほどあり、室内職工の數三百五十八餘ありて、活版機械ハ多く蒸氣力を以て運轉すと云ふ

一聖書會社　ニユーヨルク

○第五十五章　ナザレ

一ナザレハガリラヤ中著名の村となれり、そハ其美麗なるに由るに非ず、たゞイエスが三十年間、此處

に住居せしに由り、元此ナザレハ下等賤人の住む所にて、風俗も從て惡く、大に他より輕蔑を受けたり、

二　ナタナエル始てイエスの事を聞しとき、ナザレより何の善者出んやと云しも、道理ある事なり、イエスの此賤しき村に住居して、父ヨセフと共に大工の業を務めたるハ、以て其謙遜の大なるを見るべし、ナザレ人ハ此德に習ひ、神れ恩と慈を受べき筈なるに反つてイエスを嫌忌して、村外に逐ひ出だせり

ナタナエル　ヨセフ

○第五十六章　時失ふ可らず

一　一青年あり一夜友人と酒酌みかハし、互ひに歡樂れ頂上に達せし時に、友人より一封の手書來る、上に秘密用を記しあり、然るに此青年酒宴の半ばなりければ、他事を思ふに遑あらず、其儘受取てヅボンの隱しに入置たり、かくて夜も更け宴果て、我家さして歸れる時、忽ち一群の亂暴者、路傍れ暗き處より起り、物をも言ハず打てかゝり、敢なく此青年を打伏たり、

二　是れなん近頃彼を惡める者共、徒黨を結び、之を

殺せしなりと知られける、然るに其中に一人心變りせし者あり、如何にも此青年を不便に思ひ、一書を寄せて事情を密告せしに、歌舞酒宴に耽りて、之を見るに遑なく、遂に命を殞すに至りしなり、

三 我儕ハ皆惡魔の罟にかゝり、日に永遠苦痛の境に近けり、故に神ハ深き憐を垂れ、福音の手紙を以て之を助けんとなし給へり、然るに世にハ肉欲に耽り其忠告を顧みず、日々に死沒して永遠の苦に逢ふ者多くあるハ豈また悲しからずや

青年　酒宴　徒黨　永遠

○第五十七章　父親の悔

一 或父親一安息日に其小兒を遊せんと思ひ、山中に連れ往きしが、折から夏の暑き日なりければ、松の樹蔭に息ひながら、小兒を氣付居たり、小兒ハ此處彼處と草花を摘んで餘念なかりし中、父ハ眠氣を催して眠入りたり、

二 暫くして目覺し時あたりを見るに、わが兒ハ見へず、父ハ驚きて呼び歩けども、答る者ハ反響の聲あるのみ、遂に谷川の傍に來り、斷崖の上より見下せば、憐れやその兒ハ岩石の上に落ち、全身眞赤に染みて

死し居たり

三　世には父にしてその兒をよく教育せしが、基督教に教へ導く時をも忘れ、漸く其兒の青年有爲の年となるも、身を修るを能はず、あたら放蕩に身を委して遂に不測の谿底に陷落せしむる者あり、豈に悲しき次第ならずや

安息日　反響　基督教

○第五十八章　小女の信仰

一　或人其少娘を抱き、懸崖絶壁の上より千丈の谿壑を臨下せしに、少娘少も恐るゝ色なく、其景色の殊絶なるを喜べり、是に於て其父、少娘に對ひ恐るゝことなきかを尋しに、答て自身獨り谿間をのぞくときは、身慄へ魂消るばかりなるも、力ら強き父れ腕にしかと抱かれたれバ、大丈夫と思ふ故少しも恐るゝ所なしと云へり、

二　此返辭まことに味ひある言なり、昔しダビデが「我わが前に主の常に在すを見る、それ我右に在ハ我動されざる爲なり」と言しも同じ意なり、誰にても神の

腕に抱かるゝ者ハ、決して畏懼の念を懐くことなかるべし

ダビデ　神の腕

○第五十九章　マルタ

一　マルタハマリヤ、ラザロと三人兄弟にて、ベタニヤの村に住み、貴き族にて、家富み美しき家屋を所有せり、其の庭前に一族の墳墓を備へたりとの事ハ、以て其富豪者たりしを證すべし、マルタが銀三百の價高き香油を吝まず、主の足に注ぎしも、其富家なりしを見るに足る、

二　又初めハパリサイ宗を奉じ、中にも最も上流社會と交際せしが、一度イエスに從ふや、其心一變して全心主の爲め、道の爲に奉事せり、故にイエスハ其家族の篤信を嘉し、屢〻其家に宿せしとあり、

マリア　ラザロ　香油　パリサイ宗　上流社會

○第六十章　キリストの賜

一 曾て一人の瓦葺あり、一日瓦を肩にし仕事に往く途中、一通の書を得、慌たゞく披き見て、不意に瓦を投げ、大聲に呼んで「あゝ我今よりまた貧しき瓦葺にあらず」と云り、其故如何と尋るに、此人に一人の伯父あり、遠國に住んで富有の身なりけるが、近頃病に罹り世を逝れり、然るに最後に臨み、悉く其財産を瓦葺なる甥に與ることを遺言し、かくて今此由を通じ越せしなり、

二 これ我儕ハ罪惡の淵に沈み、何の望もなき憐れ貧き者なりしも、一度キリスト世に降りて、身を殺し多の人を贖ひ、福の音を傳へたれバ、之を信ずる者ハ永遠き生命を得、かつ天國の世嗣とせられて、光り輝く者となるべきなり、聖書に婦の生たる者の中いまだ「バプテスマ」のヨハネより大なる者ハ起らざりき、然ど天國の最小き者も、彼より大なるなり」とあり

罪惡　永遠き生命　天國の世嗣

○第六十一章　サムエル

一 サムエルの時フイリステ人、度々イスラエル人を苦しめしが、遂にハその天幕中に在りし、神の契約櫃を奪ひ去り、彼等の都アシドドと云ふ處に携へ往き、ダゴンと云る偶像の前に備へたり、然るに一夜を過ぎ翌朝ダゴンの宮に至りけるに、ダゴンハ胴中より折れて、契約櫃の上に倒れ居たり、

二 彼等驚きて之を元の如く修覆し置しに、又翌朝來り見れバ、ダゴンハ再び倒れて細々に砕け居たり、加之疾病俄かに市中に流行し、多くの人死沒せり、彼等初めてこハ全く、契約櫃を留め置る祟りならんと氣付き、直に之をガテの町に送りしに、此處に又疫病起りたれバ、最早如何ともすべきを知らず、牛を引き來り、其箱を車に乘せて之に牽せ、其往くに任せ置たるが、牛ハイスラエル人の住る地方に至り、再び其手に落て、後長く其中に保護せられたり、

天幕　契約櫃　アシドド　ガテ

○第六十二章　ソロモン

一 昔しイスラエルにソロモンと云ふ王あり、常に神

を敬ひて善事をなせしなば、神大に之を愛し、何にてもその望む所を與んと云しに、ソロモンハ願くハ、能く人民を支配し得る智慧を與へよと云へり、それより彼ハ前後比類なき、智識を備へたる國王となりし」のみならず、富貴榮譽も比類なき」までとなれり、

二 「或る時二人の婦人一小兒を爭ひ、王の前に來りて、裁判を請ひしに、王ハ從者に命じて劍を持來らしめ閃く刃を引き抜き、二人の婦人に對ひ、されど汝の孰が此兒の眞の母たるかを知れど、故に今各に滿足を與へんがため、之を兩斷して一半づゝを與ふべしと云けるに、一人の婦人ハ大に悲み、「願くハ其兒を助け給へ、生ながら他の婦人に與るハ生命を取るに勝れり」と請ひければ、王ハ是こそ眞の母なりと斷定して其兒を渡せしと云ふ、是れソロモンが神より受けたる智慧の一例なり

ソロモン　眞の母

○第六十三章　ルカ

一 ルカハ路加傳福音書及び使徒行傳の記者なれども

聖書中其名ハ稀に記されたり、又ユダヤ人にあらずして、スリヤのアンテオケに生れたる者なりと云ふ常に醫を業とし、イエス昇天後、深くポウロと交を結び、共に諸方に傳道せり、後ち又ポウロと共にロマに到り、艱難辛苦を顧みず、傳道して遂に殉教せしと云ふ

使徒行傳　アンテオケ　昇天　ポウロ　殉教

○第六十四章　アハブ王とエリヤ

一イスラエル王アハブの頃、國王初め人民に至るまで、上下擧て罪惡に汚れ、眞の神を棄て偶像に事へたり、即ち王アハブハ異教國の王女なる、セ・ベルと云ふ者の容貌の美麗なるに迷ひ、娶りて妻となし且つバアルなる偶像を尊び、宮を築りて之を禮拜し其國民も之に倣ひたり、

二故に神ハ預言者エリヤを遣ハして、彼等の不善不義を責め、尚又天罰として三年六ケ月間、雨を降さしめざりければ、多の者饑饉のために饑死するに至れり、然れども、エリヤハ山中に引籠りて、谷川の水

を飲み、又鴉神の命により毎朝毎夕食物を携へ來りければ、別に飢餓を覺えしとなかりしと云ふ、以て神の義人を愛し、護り給ふことを見るべし、

異教國　バアル｜エリア

○第六十五章　コリント

一　コリントハギリシャ國中樞要の地に在りて、頗る繁盛の都會たり、其風俗從つて驕慢浮華に流れ、人心亂れて淫風盛んに、遂にフェーナスと云ふ女神偶像を拜み、其殿内に於て公然罪汚の業を行ひたり、

二　此地ハ四方堅牢の石壁を築き廻し、海面より高きと三百卅三間にして、岩石の上に建られたり、城郭れ堅固なるハ、當時歐洲南方に比類なかりしと云ふ

三　紀元後五十二年ポウロ｜此地に來り、天幕を作りつヽ一年有餘留りて、ユダヤ人、コリント人に傳道し其働きによりて、盛なる教會を設るに至れり、然ども其會員の氣儘なるがため、次第に衰へ種々罪を犯す者ありき、哥林多前後両書ハ、ポウロ｜が此地方の教會に贈りし者なり

○第六十六章　ジヨーヂミユーロル

一英國にて近頃有名なる牧師、ジヨーヂ、ミユーロル氏、一日多くの牧師の集れる時、話せし言あり曰く、「予ハ千百人餘の大教會の牧師にして、なほ之に加へて、大なる孤兒院を預れり、日夜繁忙にして時々ハ祈禱、或ハ聖書を讀むを、忽にせんとする傾きあり、

二是れ蓋し諸君にも往々陷り易き過ちなるべし、然ども我等深く注意せざる可らず、我等もし大なる事業を爲んとすれバ、殊更それが爲め祈禱をなし、又聖書にて心を養ハざる可らず、

三人ハ空服にて事業を執る能ハざるごとく、祈禱と聖書に由らざれバ、到底事業の完全を望む可らざるなりと、

牧師　教會　孤兒院

○第六十七章　身を殺して人を助く

一 昔しギリシャの名將レオニダスハ、其部下三百人餘を率ゐて、潮のごとく推し寄する大軍に當りて、國の爲に死せり、其義氣によりて人心を勵まし、遂に國家を泰山の安きに置けり、

二 或國の王ハ國法を犯したる、我子を助けんがため、己れ一眼を拔き取りたり、又或婦人ハ己が夫の生命を助けんため、自ら生命を惜まず、夫の瘇物の瘡口より、毒液を吸取りたり、

三 又亞細亞、歐羅巴の北方には、多くの狼ありて、屢ゝ旅客の害を爲すとなるが、或時一紳士家族を引連れ、通過せし時、一群の狼に取り卷れ、甚だ危かりしとき、其僕代りて餌となり、其主の家族を助けたり、

四 我等の主キリストハ、實にその身を裂き、億兆の民を救ひたり、

潮　泰山　亞細亞　歐羅巴

○第六十八章　安息日戰爭の大敗

一 安息日に戰爭するハ、固より神の誡に背ける事な

り、今此日に戰ふて、勝利なりし例を擧んに、モントゴメリー將軍ハ、安息日にカナダのクヘベック府を攻撃して、一敗地に塗れ、其身も共に戰死せり、

二 米國獨立戰爭に、米人ハ安息日にモンマウスの戰を開きて敗北せり、又其頃英軍ハ安息日に、シャンプレイン湖に、戰を開きて敗北し、又ニユーオレンズにても、安息日に攻寄て、英軍の全敗となれり、

三 佛帝ナポレオン一世が、ウォートルローに大敗して、孤島幽囚の身となるに至りしも、安息日に戰ひしによると云ふ、其の他此の如きの例、枚擧に遑あらざ

安息日　カナダ　ニユー、オルレンス　ナポレオン

○第六十九章　十誡

一「汝の父と母とを敬へ」との語ハ、アラビヤのシナイ山にて、モーゼがイスラエル人に、神より受取りし十誡の一なり、

二 イスラエル人ハ其時、山の麓に陣營を張りて留り、モーゼたゞ獨り山に上りしに、山上の黑雲モーゼを

蔽ひ包み、山岳鳴動して、雲中より電光閃き、雷響き渡りて、いと凄まじき景色なりけり、

三 その時神モーゼの手に、十誡を與へたるなり、十誡の初の四は、人神に對するの誡にて、終りの六は人相互の間に行ふべき者なり、

四 その六誡の首なるは、此父母に對する誡なれば、人宜しく父母に孝順ならざる可らず、かくしてよく他人をも、愛することを得べきなり、

十誡　電光

○第七十章　貪慾なるアミンの失敗

一 昔しエヂプト國に、アミンといへる老人あり、其頃彼のヨセフの時の如く、國中大なる飢饉あり、人々大に困みしが、

二 此アミンは殊の外、黄金家にて、多く穀物を蓄へ居ければ、近隣の人々之を買はんとて、集り來れりアミンは極めて貪慾の性なりければ、容易に之を賣捌かず、今一層騰貴せし時、一時に賣拂ひて、高利を得んとせり、

三 かくてその後饑饉益す甚しく、日々餓死する者多くなりければ、今こそ一儲けなすべき時なりとて、庫を開きたるに、思ひきや、穀物は皆な虫入となり最早金子にて賣買するれ價値なく、彼れ大に失望したりと云ふ、

四 最初早く賣盡し置きなば、人を益し我身をも益すべかりしに、貪慾の心積りて、遂にかゝる損害を招きたり、また愚かならずや、

――ヨセフ

○第七十一章　母の愛心其子を取り返す

一 鷲は其性猛烈にして、常に生き物を食ふ、又其眼光の鋭きと、水中を游げる魚をも、見透すほどなり、

二 曾てスコットランドの山奥に、巣を作りたる鷲あり、一日近邊の畑に、乳飲子の枯草の上に、臥したるを見、忽然飛來り、矢庭に之を引きさらへ、雲霞と飛び去りたり、

三 農夫等之を見て、大に驚き、追掛け往しが、鷲は遥か上なる、懸崖絶壁の巓に息ひて居りければ、誰

一人攀上る者なく、躊躇し居たり、

四 然るにその子の母ハ、さながら鷲れ如く、岩より岩へ飛渡り、遂に鷲の傍へ近付くや、否、腰に挾める鎌を振り上げ、一打二打切り掛りければ、鷲ハ敢なく殺されたり、

五 而して其邊を見るに、わが子ハ幸ひ少の創もなく横り居たれバ、母ハ大に喜び、抱き取りて、無事に下り來れりと云ふ、キリストハ我等を救はんとて、自ら身を殺したり、我等深く感謝せざるべけんや、

鷲 スコットランド農夫

○第七十二章　跛兒の仁心

一 一人の旅客曾て馬に跨り、廣野を旅せる時、其地ハ人家隔りたる處にて、井もなく、水流もなく、馬ハ渴して水を求むれども、見當る水なく、困じ果て居たりけり、

二 時に十歳計の少年、向ひより來るに逢ひしが、此旅客の前に進み來り、「紳士、足下の馬ハ、水を望めるにあらざや」と、問ひければ、

三 此人直ちに答へて、「よくこそ言れたり、現に今その爲に目を四方へ配りて、捜せる場合なり」と云ひし

に、少年ハこゝに水あり、馬に飲ませ給へと差出したれば、旅客ハ大に喜び、少計の金錢を取出し、その厚意に報いんとせり、

四 然るに少年之を受るを屑とせずして、「見らるゝ如く、予ハ跛にして、此世に於て何とて爲すべき事なし、

五 さりとて神より恩を受る者の、安閑として日々を過すべきにあらざれば、何かな神の榮光の爲にとて、この人里隔りたる、水なき處へ、毎日水を持來り、渇きたる馬に飲ましめ、旅客の困難を助けんとせるなり」と云けれバ、旅客その義心に感じ、厚く禮を述べて去れりと云ふ、

廣野 紳士

○第七十三章 盲女の獻心

一 曾て或處に盲目の娘ありけるが、一日牧師の許に來り、外國傳道の爲、金一圓を寄付したり、牧師ハ其盲目にして、身分不相應の金を出すを怪み、如何にして、其金を得たるかを尋ねしに、

二 娘答へて「わらわ、盲目なるが故、御身の疑ひ給ふも當然なれども、他人よりもすぐれたる方法にて、之を蓄へたれば、御心安じ給へ、わらわ元來、籠細工を職とする者なるが、人ハ皆夜業をなさんため、燈火を要すれど、わらわに於てハ不用なり、故に此冬の間の油代を以て、傳道費に充てたるなりと云ひけるとぞ、

籠細工　燈

○第七十四章　ソドムとロトの話

一 昔しソドムの住民、大なる罪を犯して、全く神を棄るものとなりけるに、ロトの一族のみハ常に神に順ひしにより、神其住民を罰せんとせし時、豫め之に告げて其地を立ち退かしめたり、

二 然るにロトの妻ハ、故郷を慕ふの情忍びがたく、途中後を顧みたれバ、忽ち其体固結して、鹽の柱となれり、

三 故にロトハ益す恐懼の心を起し、その二人の女を伴ひて遠く逃去りたるが、後にて神ハ天より硫黄の火を降らし、隣邑ゴモラと共に、全く此村を燒滅に

歸せしめたり、[illegible]
故郷ゴモラ[illegible]

○第七十五章　基督教の實力

一　亞弗利加の海岸に、マダガスカルといふ島あり、曾て英國船此地に立寄り、船長ハ上陸して彼地此地と徘徊せる時、一人の土人に行逢ひしに、[illegible]ろの手に一卷の聖書を持てるを見たり、

二　船長ハ慰み半分に、之に對ひ「汝ハ手に一卷の聖書

を持り、思ふに汝ハキリスト教徒ならん、汝ハ如何にして其道を信ずるに至りしか、我に說き聞かせよと云へり、

三　彼れ猶豫なく答へて、「予がキリストを信ぜしハ、書籍に由るにあらず、又說教に由るにあらず、わが友に奸惡にして、盜賊を爲す者、又大酒する者、又殘酷にして妻子を打擲する者ありしが、

四　三人ともキリストを信ぜし以來、全く改心して、正直、勤勉、慈愛の人となれり、是れ蓋し其心中大に悟りし所あるべし、それより予も道を研るの心起

り、遂に之を信ずるに至れりと云ひしとぞ、

亞フリカ　船長

○第七十六章　祈禱

一マルチン、ルーテル曰く、如何に多忙の日と雖も、予は祈禱に一日三時間を費すにあらざれば、平安に其日を送る能はざると、

二蓋し氏の大業を為しも、一に祈禱の力に在りしと云ふべし、

○英國法律の大家、ソルマシユーヘール氏曰く、予ハ毎朝聖書を繙き祈禱を捧るにあらざれば、終日何の善事も為す能はざると、

◉ジヨン、ウエルスハ、一日の中密室に在て、七時又ハ八時間を祈禱に費したりと云ふ、

○祈禱ハ寳藏の鍵の如し、長しとて强ち益ある譯にハあらず、たとひ短き祈禱なりとも、信仰と眞とを以て鍛錬したる者ハ、必ず其望を遂ぐべし、

○祈禱ハ靈の呼吸なり、祈禱に由て得る者ハ、靈魂のパンなり、

○キリスト信者の武器ハ、常に祈りを以て磨かざれば錆を生ぜ、

○精神なき祈禱ハ、火の燈らぬ洋燈の如し、

○口に祈れば人之を聞き、心に祈れば神之を聴く、

祈禱　密室の鍵　靈魂　武器

版權登錄

版權所有

明治二十三年一月卅一日印刷
同　二月一日出版

（定價拾五錢）

撰者　本間重慶
大坂市北濱二丁目三十六番屋敷寄留

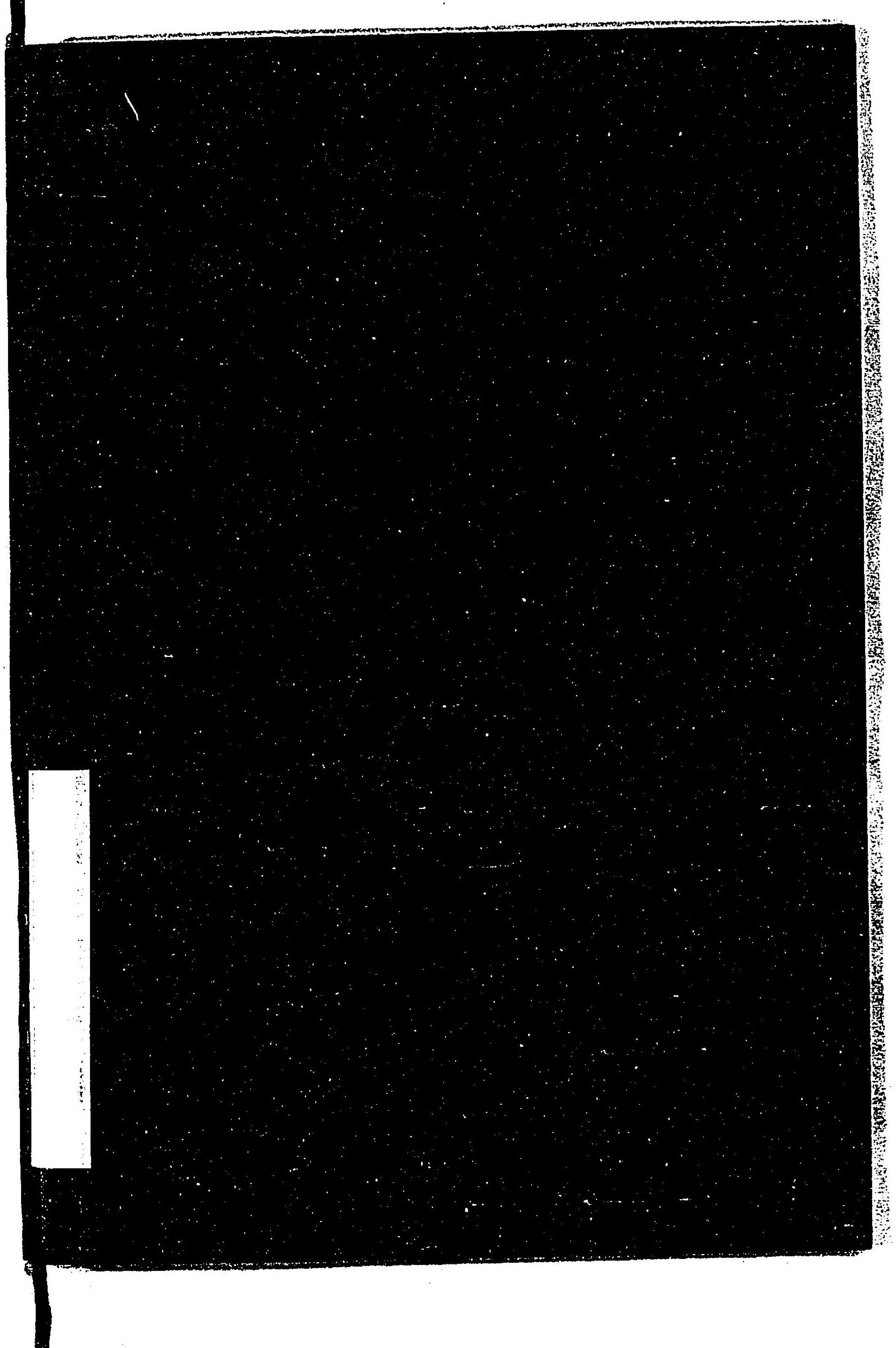
發行兼印刷者　今村謙吉
大阪市土佐堀三丁目三十八番屋敷

印刷所　福音社
大阪市土佐堀三丁目三十八番屋敷

[illegible]

發行者 今村[illegible]吉

印刷者 永田[illegible]藏



特18
714

安息学校読本
3

国立国会図書館